



残り一日で破滅フラグ
全部へし折ります1
リアルタイムアタック
～ざまあRTA記録24Hr.～

福留しゅん
Shun Fukukome



レジーナ文庫

Charater

主な登場人物



ルシア

平民育ちの男爵令嬢。
アレクサンドラには
芋女と呼ばれて
いる。

アルフォンソ

タラコネンシス王国の
王太子。
アレクサンドラの
婚約者。

ビビアナ

アレクサンドラの妹。
姉を嫌っている。

イシドロ

アレクサンドラが
懇意にしている大商人。
裏社会にも顔が利く。

セナイダ

アレクサンドラの侍女。
アレクサンドラの世話を
長年任されていた。

ジェラール

タラコネンシス王国の
第三王子。
将来の義姉である
アレクサンドラを
慕っている。

アレクサンドラ

タラコネンシス王国の公爵家の令嬢。
王太子と婚約しているが、
あまり上手くいっていない。
通っている学園で開かれる
パーティーの前日、
前世の記憶を取り戻した。

目次

残り一日で破滅フラグ全部へし折ります 1
ゞざまあリルダイブタックRTA記録24Hr. ゞ

書き下ろし番外編

残り十数年で次回作の女王を育てます

残り一日で破滅フラグ全部へし折ります

～ざまあ R T A 記録 24 H r .

1

□当日十七時

「アレクサンドラ！ 度重なるお前の悪意には、もう愛想が尽きた！ 王太子アルフォンソの名において、お前との婚約は破棄する！」

そう仰つておるのは、私の婚約者であらせられるタラコネンシス王国の第一王子アルフォンソ様。十人女性がいれば八人、いいえ九人が見惚れるほど端整な顔は、今、眉間にしわが寄っている。彼は鋭い眼差しで私を睨みつけていた。

「アレクサンドラ様……どうか罪をお認めになつてください。今なら慈悲深いアルフォンソ様は笑つて許してくださいます……！」

そんなことを言いながら、アルフォンソ様に愛おしそうに抱かれているのは、私が芋^{いも}女^{めの}と呼んでいるルシア男爵令嬢だ。

彼女の姿は子供らしいあどけなさと可愛さ、そして大人らしい美しさが絶妙に入り混じつていて、その笑顔は憎らしくらいに見る者を惹きつける。

王太子と彼女の周りには、ルシアを慕^{した}う方々がずらりと並んでいた。王太子ほどではないもののいずれも殿方からは尊敬され、女性陣からは慕^{した}われる方ばかりだ。顔立ちも整つているため、普段なら目の保養になるのかもしれないが、彼らは今、私を糾弾し怒りを露わにしている。

で、当の糾弾されている私はと、内心で嘲笑つていた。

勝ち誇ったかのように威張るアルフォンソ様と彼の胸に隠れてほくそ笑んでいる芋女^{いもめの}には悪いけれど。

おあいにく様、私は彼らを返り討ちにする手を打ち終えている。

全ては丸一日前に始まつた……いえ、引っ越し返つたのだからね。

□前日十七時

——悲報、私終了のお知らせ。婚約破棄と断罪の破滅コンボ成立まで、あと一日しかない件について。

「どうしよう、詰んだ……」

私は絶望で頭を抱え、テーブルに突つ伏した。

いや、そもそも頭の中が混乱して吐き気がするし、気分最悪。

寝室には誰もいないため、公爵令嬢であるこの私の醜態を、侍女をはじめとした使用者に見せざるは不幸中の幸いといったところかしらね。とにかく、状況を確認しなければ。現実逃避なら後でいくらでもできる。今は冷静になつて頭の中を整理しないと。

もしかしたら起死回生の一手がぱっと閃くかも知れないし。よつし、頭の中が切り替わつたら少し気分が楽になつたわね。

「まず、私はアレクサンドラ。タラコネンシス王国が誇る三大公爵家の娘よね」

私は、この世界の大陸の半島に位置するタラコネンシス王国の中でも有数の、長い歴史と尊き血を持つ公爵家に生まれたの。

三大公爵家と呼ばれる、建国の始祖の系譜。

王家の娘は三大公爵家に嫁ぎ、公爵家の娘は王子に嫁ぐ。そうやつてタラコネンシスでは、代々王家と三大公爵家が強く結ばれ続けているの。

今代の王太子であらせられるアルフォンソ様は何を隠そう私の婚約者である。これは私とアルフォンソ様が幼少の時に陛下とお父様がお決めになつた。

そのため、私は小さな頃から王妃となるべく英才教育を施されている。私も国母に相応しくあろうと死ぬ思いで頑張っているわね。

そんな風に、アルフォンソ様と結ばれる未来を信じて疑つていなかつた。それ以外の将来なんて想像すらしていなかつたのよ。

アルフォンソ様の傍らに私がいるのは当然だと思つていたし、それが神様から授かつた私の運命なんだつて納得していたのよ。

嗚呼、だから私はアルフォンソ様が芋女——ルシアに心を奪われただなんて認めたくなかったんだ。

そう、今、アルフォンソ様の心は私にはないのだ。

「アレクサンドラ様はアルフォンソ様を王太子としてしか見ていないんですね！」

それはいつぞやあの芋女いもおんなが口にした戯言ぎごんだけど、とんでもない。

私はアルフォンソ様を愛している。

勿論もちろん、王太子の彼を公爵令嬢の私が、じゃない。アルフォンソ様という一人の男を、一人の女としてお慕慕いしている。その愛は山よりも高く海よりも深いんだから。

……ただし、私の愛は天然ではなく、養殖物ようしょぶつなのだ。

私はアルフォンソ様と会う前に、婚約関係になつた。初めて会つた時の彼は紳士的だつたものの、私は特別な感情は抱かなかつたわ。

けれど義務的な関係ではお互い幸せになれないと幼いながらに考えた私は、彼を好きになるべく、ある意味、自分で自分を洗脳して恋心を抱くように仕向けたのよ。

そのかいあって、今や私は彼を愛せている。そして彼に愛されたいと思えるようになつたわ。

あの方を奪われるなんて、私のこれまでの努力と在り方、つまり私の人生を全て否定されることに他ならない。

アルフォンソ様と芋女いもおんなが仲睦なかむらまじくするのは、耐えられないわ。

国が定めた婚約に割り込むなんて許されるはずがない——そんな大義名分を振りかざ

していただけれど、とんでもない。単に嫉妬しつとを膨れふくれ上がらせていただけよ。

そして、次第にその嫉妬しつとは悪意へと形を変えて芋女いもおんなに向かつていつた。

彼女の私物を隠したり皆様に聞こえるように嫌味おとこしを口にしたり。それでも懲りないの

で彼女に直接危害を加えて、心身を貶めおとこしようとしたの。

「ほら、こんなにもルシアさんはアルフォンソ様には相応ふさわしくありません」

そう指摘して、芋女いもおんなが身分不相応な恋を諦めれば、アルフォンソ様の気の迷いが晴れ、

私達の関係は元通り。近い将来、私は王妃、ゆくゆくは國母こくもとなつてこの国を支えていく。

あがけばあがくほど、私が醜みにくさを露わあらわにすることになり、結果芋女いもおんなの純粹じんすいさが際立つ

ていった。アルフォンソ様は私に失望してますます彼女に惹ひかれていく。

それは正に悪循環。

気が付けば、私はアルフォンソ様から敵意を向けられるようになつてしまつたの。……

愚かな私は全て芋女いもおんなのせいだと決めつけて彼女への憎しみを更に強めていたのだけれど。

そして明日は、盛大な宴うたげが開かれる予定になつていて。

た。おそらく明日の宴で、彼は目に余る私を捨てて莘女いもおんなを選ぶのでしょうか。これまで散々彼女に振り撒いた私の悪意を口実に。

そんな未来、認められるわけないじゃないの！

私はアレクサンドラ、誇り高き公爵令嬢にして王太子の婚約者よ！
莘女いもおんなの分際でアルフォンソ様たぶらを誑かすとは、なんて図々しい！

私の、公爵家の力で必ず破滅させてやるわ……！

「——」というのが、ついさっきまで抱いていた憎悪めまいなのよね

莘女いもおんなへの嫉妬じとから湧き立つた憎悪で吐き気と頭痛と眩暈めまいがして最悪な気分になつて
いる私に、先ほど突然これまで生きてきた十数年間の記憶を超える量の情報が流れ込ん
できたのだ。

私が私でなくなる。

その恐怖など知るかとばかりに膨大な情報が頭に押し込まれていった。

それは私とは異なる人生、前世の自分とも言うべきわたしについての情報だ。

わたしはつい最近まで女子大生をやつていた、ただのしがないOL、社会人二年生。
男っ気なしで彼氏いない歴イコール年齢。容姿は普通というか地味。やせ気味で悲しい
ことに貧乳。趣味はライトノベルでも漫画でも何でもいいからとにかく空想作品を読み

漁ることよ。

いきなり前世を思い出したというこの状況に対しても何故なぜや、どうやって、はこの際どうでもいい。どうせ考えたところで結論なんて出やしないんだから。

肝心なのは今の私、つまり公爵令嬢アレクサンドラは、わたしの記憶の中にある彼女、
そのままだつて点ね。

「まさかここって、乙女ゲームの世界その!?」

題名は『どきどき♡高鳴るエデンの園その』での恋心なせ』、通称『どきエデ』だったはず。副題なもあつたんだけれど……忘れた。

しつかり記憶してろよ、わたし！

それはともかく、『どきエデ』はまあ単純と言うかテンプレと言うか。ただの平民で
しかないヒロインが貧乏男爵家の養女はぐくめのめのめになつて王国の貴族を養成する学園に入学し、そ
こで巡り会つた素敵な殿方と恋を育んでいく。そんな王道的物語のゲームね。

で、その乙女ゲーの攻略対象者には、将軍嫡男や宰相嫡男といった錚々たる面々が名
を連ねている。

王太子様はその筆頭。恋愛に障害は付き物で、全ルートで敵キャラとして立ちはだか
るのが王太子様の婚約者——つまり、私だ。私は所謂いわゆる、悪役令嬢つて存在なのね。ちな

みにゲームヒロインは勿論、あの芋女だ。

「えっと、『どきエデ』でヒロインにたてついた悪役令嬢の末路つてルートごとに違うんだったっけ？」

王太子様ルートだと婚約破棄後に実家の公爵家から自殺を強要され、宰相嫡男ルートでは修道院に追放され、そこに向かう途中で野盗に襲われて行方不明。将軍嫡男ルートだと追放先の土地が蛮族の侵略を受けて奴隸に。なんと市中引き回しの上で処刑なんてルートもあるのよね。

……ちょっと待つて。

どうして芋女がアルフォンソ様以外に懸想した場合でも悉く私は破滅してるのよ？ しかも死亡とか奴隸墮ちとか悲惨な末路ばつかだし。

脚本書いたの誰だか知らないけど、出てきなさいよ！

「いや、落ち着け私。シナリオライターを怨んだって今の状況は改善されないわ……」
……ただ、思い出すならもうちょっと早くが良かつたわね。

だってヒロインが攻略対象者を引き連れて悪役令嬢を断罪するのって明日じゃん！『どきエデ』はゲーム性を追求した一週間ごとのヒロインの行動を決めるシミュレーション形式と、シナリオ性を重視した選択肢で分岐するノベル形式の二パターンで発売

された。この世界がどっちのシナリオにのつとっているにしろ、ここまで進んでいると結末は確定している。

「あの芋女が選んだ相手は……」

私の記憶にある忌々しい芋女と、わたしの記憶にある『どきエデ』のヒロインを照らし合わせる。

確か芋女に恋した攻略対象者はアルフォンソ様、将軍嫡男、宰相嫡男と……アレ？ ちょっとと待つて。担任教師に大商人子息に、隠しキャラの王弟とアイツ……

「嘘、逆ハーレムエンド直前？」

何やつてくれてんだあの芋女！ よりによつて節操なく攻略対象者全員に手を出していくなんて……！

どれだけビツ……失礼、色気づいているのよ！

逆ハーレムエンドは、シミュレーション形式でもノベル形式でもない、『どきエデ』ファンディスクで実装された所謂おまけルート。ベースは王太子ルートで結ばれる相手もアルフォンソ様。ただ他の殿方ももれなくヒロインの虜になつていて、さながらヒロイン女王が爆誕したつて感じだったわね。

このルートでは、悪役令嬢は罰を受けない。ヒロインの慈悲深さに救わされて和解、二

人は生涯、友情という固い絆で結ばれるのだ。

……それは、自殺、奴隸、娼婦、処刑、そのどれもが生ぬるいと感じるほどの最悪の結果。
私、アレクサンドラの全否定だ——

「ふざけんな……つ！ そんな未来なんて断じて認めないわ！」

服毒自殺させられても、厳格な修道院に飛ばされても、私は三大公爵家の令嬢、更には元王太子の婚約者として誇り高いままだ。

けれど、莘女と和解してしまえば、私はこれまで血のにじむ思いで送ってきた日々を全部、そう……全部無意味、無価値にされる！

この私、アレクサンドラはたとえこの身が下郎に鬻られ火あぶりにされようと、断じて莘女なんかに許しを請うものですか？

とは言え、完全にチエックメイトに陥ったこの状況をどう引っくり返す？ 決まっている。

詰みだと認めず、駒を動かし続けて相手の失態を誘うのよ。

普通に過ごしていたなら、『どきエデ』最高難易度の逆ハーレムルートに突入するなんてまず無理。大方莘女も私と同じく『どきエデ』を熟知している転生者なんでしょうね。で、アルフォンソ様方に媚を売る一方で、シナリオ通りに墓穴を掘っている私を見て内

心でほくそ笑んでいたわけだ。

だからこそ、莘女は油断しているはず。『どきエデ』的にはもうハッピーエンド確定だ。でも、あいにくここはシステムに縛られたゲームの世界じゃなくて現実。プレイヤーが操作できない時間も自由に動き回れるのだ。挽回のチャンスがまだある。

残り二十四時間弱。——果たして運命を覆せるか？

「よし、じゃあまず手始めに……」

ベルを鳴らして呼びつけたのは、長きにわたり私に仕えている侍女のセナイダだ。音を立てずに入室して私の前で恭しく一礼した彼女に、私は命令を下した。

「セナイダ。執事のヘラルドについて、今すぐ探つてもらえるかしら？」

□前日十八時

公爵令嬢アレクサンドラ付きの執事ヘラルド。彼はなんと『どきエデ』の攻略対象者だったのよ！ ヘラルドは表向きでは主人に言われるがままにこき使われる美声かつ美形の執事なの

だが、実は悪役令嬢の我儘に疲れ果てていたつていう設定のキャラになる。嫌々、悪役令嬢の命令に従いヒロインのことあるごとにヒロインが健げに優しい言葉を送るものだから、ヘラルドは彼女を聖母のごとく崇拜するようになるのよ。そして自分を召使いどころかただ道具、奴隸とか扱わない悪役令嬢に愛想をつかすのよね。

そのせいで、悪役令嬢の悪行を暴く重大な場面で、彼は己の意思で主に逆らつた。人として自分を愛してくれる女性のために。悪役令嬢に仕えていた彼にとつて、証拠集めなんて朝飯前。彼により悪役令嬢は刑罰を食らつて破滅を迎えるのだ。

逆ハーレムルート爆走中の現在、あの莘女がこの執事にまで食指を伸ばしているのは確定だ。このままいけばヘラルドは、私の悪事だか何だか知らないけれど不利になる物証を盛大にばらまいてくるに違いないわ。

はっ！ そうはさせるのですか。

「お前はクビよ。今すぐ私の前から失せなさい」

裏切り者は真っ先に排除するに限るわ。

終盤の大逆転劇——『どきエデ』の攻略本に記載されていた通り呼ぶならば断罪イベント——その前に解雇しちゃえば、ヘラルドは舞台にすら上がりがれなくなるつてわけよ！

私の我儘でいきなり呼び出されるのは慣れっこだったヘラルドも、突然のこの宣告には驚いたようね。

最近コイツつたら私がいくら理不尽な命令をしてもまるで動じなかつたから、久しぶりに人間らしい反応が見られて大満足よ。

「お嬢様。私に何か至らぬ所がありましたでしようか？」

「お前があの莘女を好きだつてことぐらいとつくに知つてているのだけれど？」

「……」

私が莘女と口にした途端、取り繕つていたヘラルドの顔がわずかに歪んだ。

邪魔な悪役令嬢を退場させるまでもう少しくらい取り繕つたつていいんじゃない？ 粘土細工のお面みたいに、その微笑、叩けばすぐ崩れ落ちそうじゃないの。

「お前が誰を一生涯の相手に選ぼうが知つたことじやないけれど、私に害をなす女を主より優先させるなら話は別よ」「害だなんてそんな。確かにルシアはとても素敵な女の子ですが……」

「あら、名前で呼び合つ仲にまでなつていていたのね。あの莘女は王太子殿下をはじめとして婚約者がいらっしゃる方々に馴れ馴れしくしたあげくに、言葉巧みに擦り寄つていて誘惑していたでしょう。他の男のお手つきなのに惚れるなんて私には理解できないわね、ホント」

「お嬢様、撤回してください。その言い方では彼女がふしだらに男性を誑かしているよう聞こえます」

ヘラルドは自分が恋した女性を貶されて込み上げる怒りをからうじて抑え、従者としての態度を貫く。

さすがにまだ公爵令嬢かつ王太子殿下の婚約者である私に、下僕風情が真っ向から楣突くような真似はしないか。

「あら、事実を口にしただけだから撤回なんて必要ないわよ。それより……」

会話の途中、部屋の扉が勢い良く開かれた。次に、使用人が複数ずかずかと私の部屋に入つてくる。そのうちの一人がヘラルドの腕を押さえ込み、もう一人が彼のひざ裏を蹴つて私の前に跪かせた。

「もう当家の使用人でも何でもない、たかが貧弱な一般人ごときが三大公爵家の娘である私に命令する気？ 身のほどを知りなさい」

最後尾にいたセナイダが、両手いっぱいに抱えていた手記と羊皮紙の束を側のテーブルに並べていく。そのうちの一つ、手記を手に取ると端を折つてあつた頁を開いて私に提示した。

その手記は日記も兼ねているみたいで、日付と天気が記載されている。

「お嬢様の危惧された通りでした。このヘラルドはお嬢様の動向を詳細に記録していたようです。中にはお嬢様が接触していた裏社会の情報も——」

「ご苦労だったわね、セナイダ。まさかヘラルドが私を……いえ、この家を貶める工作をしていたなんて信じたくなかったけれど、受け入れるしかないのね」
なーんて心にもないことを言つて、私は表面上、物悲しいって顔をする。

前世を思い出してから一小時間。

その間ヘラルドが自室を離れるように誘導、セナイダに探つてもらつたわけだ。明日、アルフォンソ様方に提出するつもりだつたのだろう私がやらかした数々の悪行についての記録を。

そもそも仕える主、つまり公爵であるお父様を飛び越えて王太子へ直接、告げ口し、あげく断罪イベントで暴露するですつて？ そんなの許されるわけないでしょう。
私の行動は私一人の問題では済まされないわ。間違いなく公爵家の名譽に繋がるし、

家と王家の信頼関係にまで響く。

もし彼が公爵であるお父様に相談してたら、私一人のこととして病に侵されたと偽り領地へ静養に行かせるなど、穩便な解決策を取れるのよ。

私が接触できる裏社会も、家と関係がある所なのだし。

要は、彼の行いは私への反逆ではなく、公爵家への背任になるわけ。

「何か弁解はあるかしら？」

「……勿論ありますよ。そもそも貴女がルシアに――！」

「黙らせなさい。芋女の名前を聞くだけで耳が腐りそうだわ」

あ、あー聞こえない聞こえない。

ヘラルドが雜音を喰き散らす前に、他の使用人達が猿轡さるぐわをかませて喋れなくさせる。何かもが耳に入つてくるけれど、まあ許容範囲ね。

貴族社会における使用人は、能力もさることながら信用が第一。解雇されたヘラルドは問題ありだと解釈されて、どの家も雇わないでしょう。それとも攻略対象者のどなたかが同情して召し抱えるのかしら？

まあいい、それは今日明日の話じゃないもの。明日の断罪イベントで姿を現さなきや、ヘラルドなんてどうだつていいわ。

「ああ、そうそう。仮にも私に長年仕えてくれたんだもの……」「ついでに在庫処分もしてしまつか。

私はテーブルの上に置いてあつた、わたしならティッシュ箱ぐらいって表現する大きさの箱を、山なりに放り投げた。両腕を取り押さえられているヘラルドが受け取れるはずもなく、見事に額ひだに命中する。

「退職金代わりを差し上げましてよ。泣いて私に感謝することね」

床に転がり落ちた拍子に箱を閉じていた金具が外れた。中から、七色に輝く大きなダイヤモンドが中央に埋め込まれ、宝石がふんだんにちりばめられたネックレスが飛び出でてくる。

「お嬢様、それは……！」

その場の誰もが驚きを露わにした。

セナイダなんてネックレスと私を交互に見比べてくるし。たつた今理不尽な仕打ちを受けたヘラルドすら目を見開いていたわ。ソレは、未来の王妃にと頂いたアルフォンソ様からの贈り物。私がこそという夜会や舞踏会に出る時にしか身につけなかつた装飾品だ。私物の中でも最も高価で貴重で、掛け替えのない大切な品……だったやつ。

ええ、そう。今となつてはもう過去形よ。

「これを然るべき所で売り払えば一生働かずに暮らしていけるでしょうね」

「私自らの手でネットレスを拾い上げて箱にぞんざいにしまい、身動きの取れないヘラルドの懐に無理やりねじ込んでやる。

その間ヘラルドはただ茫然と私を見ているばかり。

「さようなら。二度と私の前に姿を見せないで」

私が顎あごでしゃくると、使用人達はヘラルドを引っ立てて退出していった。アレだ、時代劇の終盤でよく見る、罪人が引きずられていくシーンみたい。

彼は何か訴えたいことがあつたようだけれど私の知つたことじやあないわ。

さよならバイバイふおーえーばー。

「――ですが、まさかあのヘラルドさんが謀反を起こそうと企んでいたなんて……」

私と二人だけになつた静かな部屋で、セナイダが口を開いた。まだ驚きを隠せず彼が退室した扉へ視線を向けっぱなしだ。

「恋は人を盲目にする。優先順位もつけられないぐらい馬鹿になつちやつたんでしょうね」

さて、これでまず一人目を片付けた。

この調子で、私を破滅コースに叩き落とす要素をどんどん排除していくなきや。

だから次は――

「ところでセナイダ」

「はい、何でございましょうか?」

「この家の使用人を辞めて、私個人に仕える気はない?」

明日を境にあつさり裏切るこの侍女を買収するとしましよう。

□前日十八時半

「公爵家勤めを辞めてお嬢様に直接、仕えろ、と?」

私から突拍子もない話を振られたセナイダは訝しげに眉をひそめた。

「これまでも誠心誠意お嬢様にご奉仕していたと自負していますが」「勿論相応の賃金は払うわ。別に業務内容は今までと同じよ。ただ給料の形態が少し変わるものでね」「でしたら別に変える必要なんてないので?」

「勿論手間を掛けさせる分、前金は弾むわ。そうね……これでどう?」

私はテーブルの上に置いてあつた小箱の棚を引き出した。中身を見せつけてやるとセナイダの顔がさつきより更に驚きに染まる。

まあそうでしょうね。だつて指輪、アミニュレット、腕輪、髪飾り、耳飾り、髪留めなど、様々な金や銀の細工品、宝飾品が並べられているんだもの。侍女という身分では決して手が届かない貴重品ばかりね。

「さすがに全部とはいかないけれど何個か譲つてもいいのよ。勿論^{もちろん}売りやすいように職人の保証書を付けてね」

「こ、これをわたしに、ですか?」

「ええ。それで、話に乗つてみる気になつたかしら?」

これまでの私だったら「誰が、たかが侍女に装飾品なんて分けてやるものか!」って考えたでしようね。けれど前世の価値観が混ざつた今の私にとつて、宝石も貴金属もそんなに持ち続けたいって思うほどでもなくなつている。

だから、賭けのチップに最適つて価値しか感じないわ。

「お嬢様、どうしてわたしにこれほどの待遇を?」

ところがセナイダつたら、何を企んでいるのかつて、逆に私を警戒したようね。ただ

それを表に出さないのは公爵家の教育の^{たまもの}賜物か、それとも彼女が優れているからか。疑うのは当然か。逆の立場だつたら私でもそうする。いきなり宝飾品をあげるつて言われて素直に受け取れば、後が怖い。

考えているのは、コレを報酬としてアレクサンドラは一体どんな理不尽な命令をしてくるのか、辺りかしら?

「だつて貴女、公爵家に仕えているのでしよう?」

「はい。ですからお嬢様に……」

「なら、何らかの事情でお父様が私を切り捨てたなら、貴女^{あなた}も私を捨てるのよね?」

そう、これは全部自分の保身を考えての策よ。断じてセナイダを優遇するわけじゃない。

『どきエデ』では芋女がどの男を選ぼうと私は最終的に公爵家には見捨てられる。その時、今まで私を可愛がつてくれた家政婦長も老執事も、私の身の周りの世話を献身的にしてくれた侍女達も、みんなみんなまるで私なんて最初からいなかつたみたいに私に背を向けるのよ。

家政婦長や老執事は駄目ね。彼らは公爵家やお父様に忠誠を誓つてゐるので、ちよつとやそつとの誘惑には靡きやしない。

かと言つて、他のしがない使用人を金や女で釣つたところで、断罪まで一日を切つた

猶予のない今となつては何の役にも立ちはしない。

その点セナيدは忠誠心より自分の安泰を優先する、と断言できる。これから寿退職するか老人になるまで働いて払われるだらう賃金と、目の前に出された宝飾品、どちらを手にしたら利が大きいかを頭の中で天秤にかけるに違いない。

「成程、そこまで買つていただけるのでしたら無下にはできませんね」

脳内の計算が終わつたようだ。

セナيدたら今まで見せたことのないほど満面の笑みを浮かべている。欲深い淑女や強欲な商人が見せる、悪い笑顔だ。

彼女はメイド服のポケットから白くて薄い手袋を取り出すと、並んだ貴金属品の何点かを指差した。……四つか。多めだけれどまあ想定内。

「お嬢様。これからもよろしくお願ひいたします」
「ええ、よろしく」

買収成功。これで私個人の手駒ができたわ。

「ああ、分かっているとは思うけれど誰にも言ひ触らさないでね。万が一お父様やお母様に質問されたら、そうね……お嬢様に山吹色のお菓子を頂いておりました、とでも答

かを指差した。……四つか。多めだけれどまあ想定内。

「お嬢様。これからもよろしくお願ひいたします」
「ええ、よろしく」

「えなさい」

「山吹色のお菓子、ですか？」

「東方の国には、金貨の塊かまきりを菓子箱に入れて賄賂わいろうを贈るって習慣があるらしいわ」

「洒落しゃれていますね」

あの商人と悪代官のやりとりって、わたしが好きだったのよね。お主も悪よのう、いえ貴方様ほどでは、つてさ。

この場合は悪役令嬢の私が従者に送るんだから、逆なんだけど。
つてそんな話はどうでもいい。

肝心なのは、これでセナيدを自由に使い走りにできる点だ。

「で、早速なんだけれど……今日は寝かせないわ」

「ね、寝かせないって……」

「別に不純な行為に奔るつもりで言つたんじゃないわよ」

ちょっと、何を想像した？まさか私がお付きの侍女を毒牙にかけて夜の相手をさせるとか思つたりしていいでしょ？

あいにく、女同士で同じベッドに入る程度ならともかく、欲情するなんてあり得ない。「やりたいことが盛り沢山で、各所を奔走してほしいのよ。時間との勝負だから今すぐ

にでもやつてもらうわ」

「それでしたら特別報酬としてもう一個ほど、その宝飾品を頂いちやつてもいいですか？」

「……。それでやる気が出るならいいわよ」

「さすがはお嬢様、話が分かるう！」

「あ、何か早くも後悔の念が浮かび始めたわ。

いけないいけない。まだ先は長いんだから。

意揚々と貴金属品を布袋に詰めて懷にしまったセナダイダは、もう花が咲き誇る感じ

で満面の笑みを浮かべたわ。

くっそ、遠慮なくこき使つてやるんだから。

「それでお嬢様。まず初めに何をすればよろしいでしょうか？」

「商人を呼んできてちょうどいい。今すぐに」

「そう仰られましても、何を意図されているかによつて呼んでくる者が違います」「なら、これから言うことを全部暗記するか何かに書き記して」

私はセナダイダに思いつく限りの目的を語つた。

初めはちよつとしたお使い程度に考えていたらしいセナダイダも、次第に考えを改めて

真面目にメモ書きする。

聞く度に驚きの声をあげるのはどうよと、思つたけれど、まあいいわ。

説明を終えて満足した私とは対照的に、セナダイダはメモ書きを凝視して深刻な表情になつた。メモ書きを握る指に力がこもつて、若干紙にしわができる。

「お嬢様、これらですが……本当にやりになるおつもりで？」

「勿論よ。嗚呼、分かつてゐるでしきうけれど当然お父様方には秘密よ」

「お嬢様が旦那様への説明なく商人をお呼びして、事後承諾でお買い物をなさるのはいつものことです。今日も疑いはしないでしよう」

うぐ、私も抱えになつたつてのに辛辣ね。

けれど一般庶民が目にしたら卒倒しかねない贅沢三昧だつたのはこの私。私のお小遣いでは足りないからつて、公爵家の資産やツケで払うこともしようつちゅうだつた。

今から思い返せば、金遣いの荒さや公爵家への迷惑を考えない傲慢さも、アルフォンソ様に嫌われた要因だつたかもしれないわね。

もつとも、前世のわたしときに私の在り方を変えられやしない。反省する気は微塵みじんもない。

「では行きなさい。時は金なり、よ」

「かし」
畏りました。直ちに

さて、その間に私は準備を整えることにしよう。何せ、いつもだつたらあれしろこれしろと使用人に命令するだけで良かつたけれど、今回ばかりは私一人の手で遂行しなきやいけないものが多いからね。

ああ忙しい忙しい。

□前日十九時

「ご機嫌麗しゅうアレクサンドラ様。いつもお美しく……」

「世辞はいいわ。用件はセナイダから聞いているんでしようね？」

「ええ、ええ、勿論ですとも」

さすがはセナイダ。

彼女は、あれからあまり時間の経たないうちに商人、イシドロを連れてきた。

イシドロは肥満体型かつ汗つかきなものだから、見た目は最悪。けれどその中身は有

能で、多くの有力貴族御用達の大商人の一人ね。

『どきエデ』での彼は、悪役令嬢御用達の悪徳商人として登場する。時にはヒロインに差し向ける暴漢や詐欺師を雇い、時にはヒロインに盛る毒を手配する。そうした悪役令嬢の悪意を実行に移す最適な手段を用意してくれる人物だ。

最終的には彼もまた悪役令嬢と共にこれまでの悪事を暴かれて破滅するのだけれど、それはまだ明日の話よ。

私はイシドロに椅子を示した。

「座りなさい。話は手短に済ますつもりだけれどね」

すると彼は軽く驚きの声をあげた。

「なんと。いつもは私めを立たせっぱなしの貴女様にご配慮いただくとは。明日は大雨でも降りますかな？」

確かにいつもならイシドロを立たせたまま私が豪奢な椅子でふんぞりかえつていたものね。まあイシドロはイシドロで、指紋が消えるんじやないかと思うくらい手を揉みながら、私の許しもなく座るのだけれど。

「それでアレクサンドラ様。もう一度確認させていただきますが、貴女様の侍女から伝えられたご用件は本気である、と解釈して構いませんか？」

「ええ、勿論よ。でなければ貴方をここに呼びやしないわ」
私はイシドロを自分の部屋に招き入れていた。いつもなら応接室を使って応対する
のに。

私が自室に殿方を招いたことなんて片手の指で数えられる程度だ。
光栄に思いなさい。まあ彼はそこに価値は見出さないでしようけれど。

「ここに並べられている衣服と調度品、それから装飾品を全て換金してちょうどいい」
そして私は、最初の目的を口にした。

今、私の後ろには豪奢な衣服や調度品が並べられている。凡百の貴族では決して揃え
られない価値のある逸品ばかり。

けれどドレスは一度袖を通してそれっきりだし、調度品は何度か手に取つたら飽きて、
しまいっぱなしだった。私にとっては、もはや価値のないものだ。

「この中には私めの商会を通してご準備しました品もございます。売りに出されると、
何かお気に召さなかつたので?」

「いえ、イシドロの用意したものはどれも満足がいくものだつたわ。これからも使いた
いって思う品については抜いているから安心して」

「成程、道理でいくつかここにない品があるわけですね。ご愛用いただいているのでし



たら商人冥利に尽きます」

「誇りなさい。イシドロはいい仕事をしているわよ」

そう、私はドレスや装飾品を必要最低限を残し、売り扱う気だつた。

十八歳という、まだ成熟していない私の身長や体格はすぐ変わるから、少し前のドレスは着られなくなつちやう。貧乏貴族なら妹や親戚に譲るんでしょうけれど、ここは公爵家。妹達の分も新しく仕立てる財力がある。だから着られなくなつたドレスが余るのよ。それに、私は飽きっぽいので、気分次第でドレスを変える。装飾品はドレスに合わせてコーディネイトしないといけない。

結果、私の衣装棚の中は見事にいらないドレスで埋まつてゐるというわけね。服に合わせる装飾品も箱が溢れそうだ。

「それで、本当にこちらの品々は今すぐでも引き取つて問題ないと?」

「ええ。ところでつかぬことを聞くけれど、装飾品はともかく、古着つて買い取つて何か役に立つの?」

「裕福ではない貴族の方々に購入を検討いただけます。それと公爵令嬢の愛用の品となれば、箱が付きますので」

「……まさかとは思うけれど、いかがわしい趣味を持つ輩に売られる可能性も?」

「不快に思われるのでしたら、そうならないように取り扱いますが?」

「いえ、結構よ」

手放したものがどうなろうと知つたことじやないわね。私の手から離れたものが次の買い物手にも大事に使つてもらえたならなーとかは、これっぽつも思はない。重要なのは今、要か不要かだけでしようよ。

私の答えにイシドロは満足げに頷くと、大きく出た腹をさすりながら立ち上がつた。

「では査定のために商会の者を部屋に招き入れても?」

「さすがに呼び入れるのは最低限にして、後は廊下に待機させなさいよ」

「ご心配には及びませんとも。顧客を不快にさせるなど断じていしません」イシドロが手を叩くと部屋の外で待機していた商人が何名か入室し、私は懇意に頭を垂れた。さすが複数の貴族が御用達にするだけあつて礼儀を身につけている。

私が許しを与えると、彼らは早速仕事に取り掛かつた。

「それでお支払いする金ですが、いつまでに準備すれば?」

「今すぐ、は無理なんでしょう?」

「じゃあツケでいいわ」

イシドロの部下が査定を進める間に私はイシドロと他愛ない話をする。

本当なら一分一秒も無駄にはしたくないのだけれど、彼の機嫌を取るのは結構重要な
のよね。彼の興味を引ければ、こっちの要求以上の成果を出してくれるもの。

「これらの品を買つていただいた際は公爵家にお支払いいただけたと記憶していますが、
今回の買い取りの代金はアレクサンドラ様にお渡しすればよろしいですかな?」

「そうしてちうだい。私が買つてもらつたものなんだから、どう使おうが私の勝手よ」

「当然、突然要らなくなつたから売り払うんじゃないのだ。それだけのためにわざわざ
大商人であるイシドロ本人を、こんな時間帯に呼び出したりはしない。

私は個人が自由に動かせるお金が今すぐ欲しかったのよ。

「それで、私の意図に適う人は雇えそうなの?」
次の一手として動かす駒を確保するためにね。

□前日十九時半

「——さすがに見くびらないでいただきたいですなあ。金払い次第で靴磨きから殺し屋
まで、一流の人材を私めの商会が責任を持つてご紹介いたしますとも」

「じゃあ費用は今売つた分で払うってことで足りそう?」

「問題ないと思われますな。それで、お支払いの方法ですが、前払いで三割、成功報酬
で七割でしたかな?」

「ええ。割合は譲歩してもいいけれど、二回払いは譲れないわ」

さすがに全額前払い任せられるほどは、信用できない。かと言つて全額成功報酬だ
と受けてもらえない心配もある。仕事として成立させるなら二回払いが妥当でしよう。

「イシドロも莘女いもんじょは知つているんでしよう?」

「アレクサンドラ様が激しく嫉妬しつとなさる……おつと失礼。巷ちまたを騒がす男爵令嬢めいしょれいせいですね」
殴るわよ、ゲーで。

「一般庶民の間でも噂うわさされていますよ。井戸端会議で格好の話題になつていいのうです」

「ふうん。どんな風に言われてのか興味あるわね」

「そうですな。何でも有力者の子息はへを侍らす女王様ひめのうさまなどりとか魔女まのわとか言われているん
だそうで。はて、一体どなたがそのような悪評あくひやうを触れ回つてしているのでしようかね?」
「さあ? 実際その通りなんだから誰が口走つていようと関係ないじゃないの」

「そうですね。色恋沙汰は話題に上りやすいですしねえ。逆に男爵令嬢は身分違いの恋に翻弄された悲劇の少女で、愛される彼女に嫉妬した傲慢な公爵令嬢がいじめている、とも噂されておりますよ」

「……こんなことになるんだつたら、もつと情報操作しておくんだつたわ」
情勢をかぎ分ける嗅覚が要の大商人であるイシドロは、当然この昼ドラも震むヒロイシノ周りの話を把握している。私がコイツを使つて芋女の嫌がらせを画策すると、いつもこうして軽口を叩いてくるのだ。その度に癪を起しきかけたものよ。

「まず一つ目の依頼は今晩の密偵でしたかな？」

「ええ。男爵邸に忍び込んで芋女の私室の様子をうかがつてきてほしいのよ。夜が明けるまでの全てをね」

まずは芋女の寝室を探つてきてもらいましょう。

これは『どきエデ』で悪役令嬢を断罪する前夜、ヒロインと攻略対象者がとうとうその愛を確かなものとするからだ。身分の違いを乗り越えてこれから巻き起こるだろう様々な苦難も受け入れ、二人ともう戻れなくともいいという決意を胸にして。で、だ。その前夜イベントなんだけれど、攻略対象者からの好感度次第で描写が違う。ファンディスクでは、単なるノベルゲーの選択肢だけじゃなくて、これまでのミニゲー

ムのスコアも絡んでくるのだ。それで高得点をあげて好感度を最高にすると、ご褒美とばかりに濃厚な夜をおわせる描写になるわけよ。

「アレクサンドラ様から頂いた簡易間取り図がありますのでそう難しくない仕事ですが、わざわざ男爵令嬢の私室に行きただ観察してこい、ですよね？ それってつまり……」「……ええ、そうね」

きつと芋女とアルフォンソ様はよろしくやつてくれちゃうんでしょうね。

まだ婚約関係を結んだままの私を差し置いて、ね。

「出歯亀できて破格の報酬が入るとなれば、誰もが諸手を挙げて歓迎するでしょうな」

「仕事として好きなことがやれて報酬の入りが良いんだつたら、それはそうよね。私は他人の恋の営みなんて、お金をもらつたつてごめんだけれどね」
アルフォンソ様は美男子かつ細マッチョで見栄え最高だし、芋女だつて乙女ゲーのヒロインらしく美少女だものね。さぞ扇情的なやりとりを拌めるでしょう。
あー、想像しただけで吐き気がするわ。
どうしてそんな情報を掴みたいか。

大義名分がいるからよ。

のけで貧乏貴族の令嬢と肉欲に溺れました。そんな感じのね。

体裁なんて悪役令嬢が退場した後で取り繕うのが『どきエデ』なんでしょうけれど、

鎮火前に大炎上させたらどうなるかしら？

この情報をばらまいても良し。明日、婚約破棄騒動を起こされた時の反撃の材料にし

ても良し。何なら国王陛下にご報告する資料にしてやつてもいいわね。

どう転がしても芋姫にとつては痛恨の一撃になる。

「いつものように人員はこちらで選定して、アレクサンドラ様にはご報告だけいたしま

す。何時頃までにご報告に伺えよろしいので？」

「朝方にはお願ひ。その情報をもとに明日は動き回りたいのよ」

「ふうむ、今回はやけに急がれますな。理由をお聞きしても？」

「明後日になれば分かるわ。悪いけれど今説明する気はないの」

さて、これでヒロインこと芋姫とアルフォンソ様への対処は決まった。明日の朝がお

楽しみ、つてね。

次は……芋姫を守る逆ハー構成員共への対策か。

統きました、将軍閣下と宰相閣下のご嫡男を社会的に排除する人員についてです

が……」

基本的には『どきエデ』の断罪イベントは、攻略対象者達がヒロインを庇い立てしながら悪役令嬢を糾弾、王太子様も加勢するつて展開なの。逆ハーレムルートだと攻略対象者が勢ぞろいしてオールスターかよつて感じに画面を占めてきたつけ。

王太子ルートと逆ハーレムルートでは王太子様が切り込み隊長となつて悪役令嬢を責め、取り巻き達は補助に回る。その筆頭が将軍嫡男のバルタサル様、そして宰相嫡男のロベルト様。

その二人に、舞台に上がつてこないよう、退場願うとしましょう。

「——以上のような手筈でよろしいですかな？」

「ええ、充分よ」

たとえ汚い手を使ってでもね。

「では更に統きました——」

依頼が終わつた頃、イシドロの部下達が査定を終えたようで報告しに来た。イシドロは自ら算盤をはじいて再計算し妥当性を確認、私に金額を提示する。

「これら全てを売り払うとなると……ざつとこんなものですね？」

「……私の金銭感覚が庶民とかけ離れているのをいいことに足元を見てはいないでしょ

うね？」

「とんでもない！ 我が商会はアレクサンドラ様にいつもご贔屓にしていただいている身。どうして騙すなどいたしましょう？」

「言つてみただけよ。そういう点でイシドロは信用できるもの」

おおう、思った以上の金額になるわね。

凄いと思う反面、私つたら今までどれだけ散財したんだって呆れるわ。

依頼の報酬を払つてもまだ余裕がある。これなら少しは手元に残しても……やつぱいいか。捨てる時は思いつきり、つてね。

「じゃあこれで商談は成立ね」

「毎度ご贔屓いただきましてありがとうございます。今後もぜひ、私めの商会をご利用いたただければ」

「ええ、そうさせてもらうわ」

私とイシドロは互いに笑い声をあげる。

きっと傍らで控えるセナイダの目からは、このやりとりは悪役同士の密会みたいに見えたでしようね。

□前日二十時

公爵たるお父様は、広大な領地の統治と王政の補佐とで多忙な日々を送つていらつしやる。けれど、夕食だけは極力お屋敷で家族と一緒に取るようにしていた。

今日もまたその例にもれず、お父様は馬車を走らせてお屋敷に戻られる。

食堂ではお父様を含めた公爵家の家族が着席していた。

兄で公爵家嫡男のセシリオ。妹のビビアナとエスメラルダ。ビビアナと双子で、弟のプラシド。それから公爵夫人のお母様だ。

凄いのは、私達五人兄弟つて全員お母様の子だつてことよ。大抵有力貴族は政略上、妾を持つて多くの子を育むのに。

そんな公爵家での私の立ち位置は、わたしという第三者の視点で語るなら、微妙の一

言に尽きる。

プラシドは分家筋に婿養子に行く段取りになつていて、近々婚約するそうだ。

問題のはビビアナ。彼女はあるうことか、なんと芋女に懷柔されていた。

元々、私とビビアナは仲があまり良くなかったけれど、それでも挨拶を交わす程度の交流はあつたのよ。けれど今となつては、すっかりビビアナから忌み嫌われている。

と言うのも、将軍嫡男達に憧れる彼女は、自然とヒロイン派閥になつたのよね。私がヒロインをいじめる度に、間接的に私に対する妹の評価は下落していくわけよ。私がと仲良くすれば見目麗しい殿方に感謝されるらしいしね。

……アンタさあ、公爵家の令嬢が貧弱一般人に毛が生えた程度の男爵娘に擦り寄るとか、誇りつてものがないの？

そんなわけで私とビビアナは犬猿の仲。彼女と会話するのがそもそも時間の無駄なので、ここ最近は口もきいていない。

エスメラルダはそんな私とビビアナ、姉二人の板挟みになつていて……というのは表向きで、どうも時間に余裕のあるビビアナが私の悪評を吹聴^{ふいとう}しているらしい。嫉妬深い醜い女だとかなんとか。脚色はしてあるが、事実もあるのであえて反論はしていない。お陰様で最近はエスメラルダにも避けられるようになつたわ。

もつともアルフォンソ様が芋女に靡く毎日に苛立つ私が痼癖^{かんぱく}を起こしたりもしたの

で、その影響もあるかもしない。

さすがに末の妹にはこれ以上嫌われないよう改めないと。

で、お父様とお母様。お二人は私に対しても複雑な思いを抱いているみたい。

次期王妃としての厳格な教育を受ける私は、幼少期に遊ぶ暇なんてなかつた。なのにここに来て用済みと言われているようなものだ。努力が無駄になり怒る気持ちは察するつて感じらしい。金遣いが荒くなつたのも、あの芋女が現れてからの憂さ晴らしだし。それでも、私の醜態が見逃されているのは、私がアルフォンソ様の婚約者であり続けているから。

婚約破棄されたら最後、私はもうお終^{しま}いだ。

「お父様。折り入つてお話をございます」

「ん？」どうしたんだ、私の愛しい娘よ」

「ここ最近不機嫌なあまり一切口をきかなかつた私からの発言は、食堂の片隅に控えていた使用人達を驚かせた。

お父様は笑顔で続けるよう私に優しいお言葉を下さる。まだこんなにも私を愛しているだけのなんてと思い、少し感動した。

「私、王太子殿下の婚約者を辞退しようと考へていますの」

けれど、そんな安穩とした空氣に私は爆弾發言を投下する。

お兄様は肉を刺したフォークを口にしたまま固まり、ビビアナは手にしたナイフを皿の上に取り落とした。次の料理を運んできた使用人は、危うく皿ごと床にぶちまけそうになる。普段何にも動じないお父様すら、しばし目を見開いて私を呆然と見つめるばかり。

「……アレクサンドラ、それは一時の気の迷いかな？」

「いいえ。こんな結論に至ったのはつい最近ですけれど、ずっと前から思い悩んでいました。私はどうやらアルフォンソ様の伴侶として相応しくないんだ、って」

はは、言つちやつた。言つてやつちやつた。

私は自分からこれまでの私自身を全部否定したのだ。

他ならぬアルフォンソ様自らの手でずたずたにされる前には！

『どきエデ』の知識を得た今、もはや私があの方の愛を取り戻す術はないと分かつてゐる。もうあの方は、私には振り向いてくださいらない。
元々私の恋心は私自身が焚きつけた偽物。なら潔く身を引けばいい。それが私のささやかな自尊心を汚されない、最後の手段なのよ。

ええ、勿論辛いわ。この胸だって今にも張り裂けそうなほど痛い。喉はからからで頭はぐらぐら。大丈夫よつて自分に言い聞かせても、苦い感情が込み上げてくる。今にも

悲痛な叫びをあげたい、泣いて何もかも忘れない。

けれど駄目。今だけは我慢よ。

泣いたつて私の状況は改善されないんだから。
決して冗談ではなく決意は固いと分かつてくれたのか、お父様は軽くため息を漏らした。

「この王国の王妃は代々三大公爵家の娘と決まっている。お前が辞しては、誰を後釜にする？」

「ご心配には及びません。この家にはまだ二人も娘がおりますもの。私は最近アルフォンソ様と仲睦まじくしているビビアナを推薦しようと考えています」

「はあつ！」

まさか名前を挙げられると思つていなかつたのか、ビビアナがはしたなくも素つ頓狂な声を出した。しかも椅子を倒す勢いで立ち上がりつちやつて。

「お父様のお耳にも、ここ最近、私が行つてゐる不始末は届いていらつしやるのでしよう？」

「……確かに度を超えてゐるとも言えるが、まだ私が取り繕ふる範囲ではある」